

## 随想 金沢YMCAの創立と主事をしていた頃の思い出

金沢YMCA 第4代主事 酒井 哲雄

戦後、金沢YMCAの成立は早く、1946年2月に中国の南京が難民事業に従事していた大阪YMCA主事の高山章さんが日本に引き揚げ後、金沢YMCA創設のため赴任されたことからはじまったものと理解しています。

戦後、日本YMCA同盟ではYMCA運動の全国展開のための一環として、会館復興計画を機に金沢YMCAもその計画に組み入れられ、それに引き続いて1953年8月22日～23日開催の野本YMCA同盟成立50周年記念大会で、その記念事業のプロジェクトの一つとして金沢YMCA会館建設があげられました。当時の番匠鐵雄理事長も募金委員となって、その一翼を担うことになりました。それによって金沢YMCA理事会は、市内中心部に在った県知事公舎前の旧日本赤十字診療所を、YMCA会館として改装購入することを決定しました。

当時は瓜生菊雄さんと高山章さんが大阪YMCA復帰後、YMCAの活動を金沢教会はじめ諸教会の協力によって精力的に展開されていました。YMCAは北陸学院院長の番匠鐵雄さん、初代理事長の三浦孝次さん（金沢大学薬学部長、後に北陸大学学長）はじめワイズの有力な会員の協力援助によって社会的認知を受け、青少年活動も柿木島の会館が与えられることになり、飛躍の時期が目前に迫っていました。その大切な時に瓜生さんは体調不良で長期入院されるというハプニングが起きました。また、会館購入のための資金確保の募金活動と同時に、YMCAの地域社会に対する青少年活動の展開と浸透のプログラムの推進などのための人材の確保が金沢YMCAから日本YMCA同盟に求められました。そこでピンチヒッターとして指名を受け、私が金沢に急遽派遣されることになりました。

新幹線のない時代、上野駅から金沢駅までの夜行列車の旅は長いものでした。約1年間の金沢YMCAの応援でしたが、現在90歳を超える私にとって楽しい人生の一齣であったと回想しています。金沢は山紫水明の地です。毎日早朝の兼六園を抜けての通勤、大学生のボランティアリーダーとの交流、近郊の山々への小学生たちとの山行——白山や立山も、それにもまして七尾線や西田幾多郎の生地、宇ノ気の訪問も数度行ったことなど。

勿論、YMCAの仕事も理事長の指示のもと精一杯させて頂きました。小学生、中学生の学習クラスの成果が実り、市内中学生一斉模擬テストを数回実施して資金的余裕など出来て年が越せたこと、番匠先生に同行しての北國銀行はじめ地元企業への募金活動、果ては富山に出向いて北陸電力本店に乗り込んで私自身の胆力をつけてもらったことも金沢での思い出です。それにもまして、下石引町の番匠先生宅での番匠節による、台湾、鹿児島での牧会の話、東京神学社時代の岩倉邸での書生時代の話など、夜が更けるのも忘れての清談は忘れられないものでした。本当に自由に金沢YMCAで働かせて頂いたことに感謝しています。

## 随想 1960年代前半の思い出

金沢 YMCA 第7代主事 羽鳥 直之

1960年着任早々に結婚した私たち夫婦は長町の淡中医院の診療室と母屋をつなぐ廊下の屋根裏部屋から新婚生活が始まりました。1961年正月は大雪に見舞われ、早天祈祷会の後に帰省を考えていましたが、列車は不通です。困っていたところ、パン職人をしていた福島源爾さんがパンを一本抱えてやってきました。「食べ物ないだろう?」、全くうれしいことでした。午後から夜までの勤務なので午前中に卯辰山で滑って午後から出勤したところ、「今朝スキーやっていたでしょう」と通報がYMCAに入っていて、すべてが監視下にある思いでした。淡中夫人には「雪が降って喜ぶのは、羽鳥さんと犬ぐらいよ!」と言われてしまいました。

雪雷を身近に聞いた金沢市長町の屋根裏部屋の生活は私たち夫婦の原点です。番匠鐵雄理事長の暖かい見守りがあり、会員の方のお助けもあって無事に新婚生活をスタートさせ、55年の歳月が過ぎました。誠にありがたいことと感謝申し上げます。

富山の砺波平野にある県立高校のハイスクール YMCA の指導をしていた筏井先生をアシストしていました。文化祭でハイYの展示をしたいと準備をしたのですが、校長が「YMCAは宗教団体だから許可できないと言っています。校長先生を説得してください。」と緊急連絡です。早朝一番列車で石動から城端線で砺波平野に入りました。ただ一人、駅のプラットホームから見る光景は雪の平野でした。県立福野高校の校長先生から説得しましたが、不調に終わり、結局、富山市まで行き、県立富山高校の校長先生からハイY活動とYMCAの内容の説明をして理解を求めました。ようやく許可が出ました。砺波のチューリップフェアに招待を受け、その美しさに驚き充実感を味わいました。その頃の高校生が今、金沢市内の教会で指導的なお働きをしていることを知り、神様の豊かなお導きに感謝をささげます。



ハイY俵キャンプ(1961年7月31日～8月3日、前から二列目の左端：羽鳥夫妻)

## 随想 金沢YMCA創立 70 周年記念式典の快挙を祝う

金沢 YMCA 第 10 代総主事 笠井 康助

創立 70 周年を迎えられ、心からお祝いを申し上げます。70 周年と云えば 1946 年、戦後一年、激動と混乱の時代に YMCA が立ち上げられた事を思いますと、信仰と熱意に結束した同志の方々の行動力であり、見えざる神様の御導きの賜と存じます。

戦後の混乱期には大 YMCA と呼ばれた、東京・横浜・名古屋・大阪・神戸等の YMCA では、空襲で町々は焼け焦げ、会館は崩壊するか米軍に接収され、多くの会員の方々は散り散りになり、再建に立ち上がる事が困難でした。そのような時期、希望に萌えた若芽のようにすくすくと育ち、ムーブメントとして金沢 YMCA は設立されたのです。

特に北陸地方は仏教王国と言われていた土地柄から、キリスト教の発展は誠に厳しいものがあったと存じます。そのような風土の中にあって、創建当時の初代三浦理事長、会員の方々始め、番匠理事長を中心にして金沢 YMCA の維持発展に尽力された皆様の御努力は並々ならぬものであったと推察致しております。

その後 1970 年代、時あたかも学園紛争やキリスト教会の一部でも造反のあった時期、前任の主事が退職、三浦理事長の要請を受けて私は金沢 YMCA に赴任しました。しかし、当時の金沢 YMCA の状況は十分に把握出来ていない中での就任でした。情報の不確かさは、一時的な事業の再建には向かったものの、労働組合との対応に加え、後任の理事長の信頼を失った結果、退職に至りました。それが金沢 YMCA の事業を衰退に導く事になってしまったのです。しかし、今日、金沢 YMCA が創立 70 周年記念式典を迎えられた事は、YMCA が Institution ではなく、Movement である事を証明されたものです。

最後に、重ねて、金沢 YMCA 創立 70 周年記念式の快挙を心からお祝い申し上げます。

## 随想 金沢YMCAと英会話学習

元金沢YMCA英会話講師 米永 吉範

1960年代、金沢在住の欧米人は僅かでアメリカ文化センター職員、北陸学院教師及びキリスト教宣教師ぐらいではなかったでしょうか。東京オリンピックの開催が契機となり、社会人の間にも英会話学習の機運が高まっていました。当時の金沢では、一般社会人にとっての英会話学習と言えば、YMCAの講座が唯一だったと思います。

講座の講師陣には、当時としては珍しく単身金沢にやって来た人がいます。YMCAを訪れたアメリカ人青年ハリスが金沢滞在を希望し、講師として採用され、その後、長期間金沢で生活することになったのです。他の講師陣は、金沢大学の小西先生夫妻、桜丘高校の春田教諭。私は、1年間の米国留学から帰国した年の翌年、1967年春から講師の依頼を受け、週2回の講座を共に担当しました。

1968年、私の関係する国際交流団体のプログラムで来日経験のあるアメリカ人大学生キャシーが卒業後に来日を希望し、YMCAでの活動経験もあるので講師として採用され、諸プログラムの活動にも積極的に携わることになりました。

1964年には、英会話クラブ「ファミリークラブ」を立ち上げ、学生や社会人のメンバーで活動をした事も記憶にあり、メンバーの内4~5人が米国へ留学したことを思い起こしております。



1964年英会話クラブメンバー集合写真

## 随想 青少年奉仕賞を受賞して

金沢YMCA 評議員 数澤 輝夫

第114 回日本YMCA 同盟委員会が2004年 6 月19～20日に東山荘で開催され、当日「青少年奉仕賞」受賞者を代表して、次のように謝辞を述べました。

### 日本YMCA同盟「青少年奉仕賞」受賞の謝辞

これ皆一つとならん為なり ヨハネ傳 第17章 21節

新約聖書改譯英国聖書會社 明治39年(1906年)1月31日発行

第114回同盟委員会に於いて、私たちが「青少年奉仕賞」を受賞することは、誠に身に余る光栄です。

日ごろからお世話になっております皆さまがこのような晴れがましい会を催して下さいましたことは、まことに感謝にたえない次第であります。衷心より厚く御礼を申し上げます。

さて、私は1952年11月に金沢YMCA 入会以来、今日まで51年8カ月、会員として歩んでまいりました。その間、サイクリングクラブ会長・クラブ総括委員長などを務めました。

1956年頃からサイクリングはブームとなり、いち早く金沢YMCA サイクリングクラブが誕生して活動が始まりました。1957年11月に石川県サイクリング協会が設立され、YMCA に事務局を設置、初代県協会事務局長(1957年11月～1961年9月)、副理事長、理事長、参与を1992年3月まで歴任しました。この間、第13回全国サイクリングラリー石川大会(1969年8月)、第6回中部日本サイクリング石川県大会(1974年9月)、第34回全国レクリエーション大会[能登路サイクリング](1979年10月)、第13回中部日本ブロックサイクリング石川県大会(1981年9月)などを開催しました。1970年9月、おはようサイクリング石川県協議会設立、理事を1992年3月まで務めました。

1975年9月、石川県バイコロジー運動をすすめる会設立、理事長を1992年3月まで務めました。1956年以来、県内各地域に於いてサイクリング教室、地方指導者講習会・研修会及び県サイクリング大会などを実施し、これらを通じてスポーツレクリエーションの一分野であるサイクリングの普及発展に寄与するとともにサイクリング活動により青少年の健全な育成に努めました。

この度は、「青少年奉仕賞」としてこのような榮譽を賜りましたのは、ひとえに皆さまの多年にわたるご支援、ご協力によるものと心よりお礼を申し上げます。

現在は、理事・常務委員並びに金沢ワイズメンズクラブ会員として、地域奉仕活動に参加するとともに、金沢YMCAの再建を願いつつ、新たなる目標を目指して前進に努めております。今後ともご指導、ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

「青少年奉仕賞」の受賞者を代表して謝辞といたします。どうも有難うございました。

2004年6月20日

青少年奉仕賞受賞者代表 金沢YMCA 数澤 輝夫



## 随想 ともがき ひろがり行きて

金沢 YMCA 常務理事 澁谷 洋太郎

ワイズソングの歌詞に、

歌えば 心ひとつに  
ともがき ひろがり行きて  
遠きも 近きも皆  
捧げて 立つやワイズメン  
栄えと 誉れ豊か  
まことは 胸にあふれん

とあります。わたしたちは例会の習慣として軽く歌っているかもしれませんが、なかなか味わいのある文言であります。

「ともがき ひろがり行きて」で思い出すのは「金沢わいわい寄席」であります。この発端は森乃福郎師匠との出会いであります。26年前、金沢クラブと滋賀蒲生野クラブがDBCで結ばれ姉妹クラブとなった時に、合同例会で福郎師匠の落語を聞いたことがきっかけです。形式ばらずに即席に舞台をつくり、語ってくれた師匠。こんな人がワイズメンに、京都洛中クラブに居られるのだと、認識を新たにしました。ワイズメンズクラブの「ともがき」の広さでした。早速自己紹介をして、近い将来企画をしたら京都から金沢へ出かけてきてくれる約束をいたしました。それが「金沢わいわい寄席」の誕生の発端であります。皆様のご協力を得て10年のロングランとなりました。福郎師匠は「金沢わいわい寄席」の再開にやる気満々であります。



2004年3月15日 第1回金沢わいわい寄席（金沢YMCA・金沢クラブ・金沢犀川クラブ共催）  
石川県立音楽堂B1F交流ホールにて（写真提供：北國新聞社）

## 随想 YMCAの今昔

金沢 YMCA 理事長 朝倉 秀之

「学 Y」と「シティ Y」の二つの流れの中にあつて、私は学生時代、いわゆる「学 Y」に所属して、どちらかという「シティ Y」に対抗するような雰囲気があつたことを思い出します。しかしながら、当時でも仙台にあつた「シティ Y」が「学 Y」を目の敵にするということはありませんでしたし、「学 Y」の方の思い込みであつたのだらうと思います。どちらかといえば協力する体制にあつたのです。

思いがけず金沢にある金沢 YMCA の理事長兼常務委員長の役目を負うことになつたのは、不思議なめぐり合わせであります。井上理事長の後をお引き受けして、今までの計画を縮小することなく進めて行きたいと考えていました。さらに魅力的な楽しい金沢 YMCA を作っていきたくと思っています。

現代は親殺しや子殺しのニュースが多いように思われます。しかし、統計を見てみると、現代になって増えているのではないことがわかります。2007 年現在で 75 件の、いわゆる尊属殺人が 1960 年代にはその倍の 140 件もの殺人があつたことを知らされます。昔、今時の若者と言われていた私も現代の若者はわけがわからない、と言うようになってきています。

Y との関わりがあり、いろいろと思い出の場面が臉に浮かんできます。リーダーの一人だつた藤森元さんが書き残した分厚な二冊の本が手元にあります。

一つは『アジアの中の日本とキリスト教運動』と題され、「ナショナルなもの世界的なもの間」という副題がついており、藤森さんの視野と活動範囲の広さに驚かされます。ここに述べられるような観点と経験が、近年の日本には希薄になっていることを残念に思うものであります。

もう一冊は『大学とキリスト教運動と私』で、「世俗なる聖なる生」と副題があります。学 Y に身を置いた彼が大学の学生たちと火花を散らして、議論したり思索したりした様子うかがえます。当時の YMCA は、若者の問題意識が渦巻き、エネルギーが充満していたことを知ることができます。

YMCA の歴史をふり返ると、時代と社会に対する貢献は大きかつたのです。YMCA の原点は青少年の全人的な育成でありました。1844 年のロンドンに折からの産業革命で農村から都会へと追われた彼らは、働きづめで私生活に余裕は無く、社会にもそれに対応する施設もなかつたのであります。「それを自らつくり出した余暇活動が、やがて YMCA というクラブになつた」(池田鮮氏)ことが語られています。YMCA 運動のスタートは決して恵まれた環境からではなかつたという歴史的な背景があります。

故竹中正夫先達も、「この世の旅路においても、YMCA の歴史においても、苦難と希望は避けられない課題であつた」と述べておられます。

金沢 YMCA も同様に苦難の歴史を経験しています。しかし、全国に展開する YMCA の仲間たちからの激励を、私たちは忘れてはならないでしょう。『武士道』で知られている新渡戸稲造は、YMCA 運動のリーダーでもありました。若者に生きる力と希望を与えよ、と説き続けたのであります。青少年に愛と力と希望を与えなければ、社会の未来はないのです。金沢 YMCA はそのヴィジョンを抱きつづけたと思うのです。

## 随想 金沢YMCAと上方落語を楽しむ

金沢 YMCA 評議員 北 肇夫

2010年11月7日(日)、“上方落語を楽しもう～金沢わいわい寄席～”は8回目を迎えた。これまで金沢YMCA、金沢ワイズメンズクラブ、金沢犀川ワイズメンズクラブ(以降クラブと略称)の3団体が協働して企画・運営・実施してきたものである。その初回開催は2004年2月10日であり、それ以降、ほぼ毎年、会場を石川県立音楽堂 交流ホール(うち1回は、金沢文化ホール)として、動員数150～200名で開催されてきた。

この行事の運営は先の3団体による実行委員会形式で行われ、各回、金沢クラブまたは金沢犀川クラブが責任クラブとなり、チケット販売などによる収益金は金沢YMCAに献金してきた。また、このイベントの実施にあたり、金沢市教育委員会や地元マスコミ 北國新聞社、日本放送協会 金沢放送局の協賛を得て、またポスターの設置、チラシの配布、金沢YMCAのホームページへの掲載などをおして広報に努めた。

落語会の演者は、二代目森乃福郎師匠(元・京都洛中クラブ会員)が毎回務められ、助演には、若手または熟練の落語家1名が加わり、古典落語・新作落語・小噺(こばなし)・南京玉すだれなど話芸を中心に幅広い披露があり、楽しませてくれた。二代目森乃福郎師匠(本名は山田信悟さん)は、澁谷洋太郎ワイズ(金沢クラブ)との交流があり、この金沢わいわい寄席に出演する縁となった。また、森乃福郎師匠は、全国のYMCA、ワイズメンズクラブなどでの上方落語のほか講演活動もしておられ、いずれも好評を博している。

なお、第8回金沢わいわい寄席の終了を機に中断とした事由は、近年、金沢でも落語の公演が多くなり、観客動員数が頭打ちとなり、また、会員の高齢化・固定化・硬直化などから肉体的にも経済的にも負担が大きくなってきたことにあった。今後とも、参加しやすい行事や日程などをおして、金沢YMCAを支援する事業を検討する必要性を痛感している。



2010年11月7日 第8回金沢わいわい寄席(当番:金沢犀川クラブ、会場:石川県立音楽堂交流ホール)



## 随想 金沢YMCAとハイY

金沢YMCA 理事 平口 哲夫

金沢YMCAのNEWS第6号(2005年12月号)に「教会・ハイY・シティY」と題する私稿が掲載されている。そこで述べたように、金沢市立野田中学校に入学した当時、1年生は現在の金沢大学附属高校の敷地内にあった元陸軍騎兵兵舎を活用した分校で学び、2年生になって本校に通いはじめてから演劇部に入会、劇の練習中、窓から見える日本基督教団若草教会のことが話題になり、1年先輩の藤田英典さんに誘われて若草教会の日曜学校に行くようになった。藤田さんは泉丘高校に進学するとともにハイY(High school YMCA)に入部したので、私も同校に進学すると当然のごとくハイY生になった。金沢YMCAの元主事、上関和夫さんも泉丘ハイYの1年先輩だった。



高校1年の夏休みに参加した佻キャンプ(1961年7月31日～8月3日)は、金沢YMCAの羽鳥直之主事、若草教会の森野善右衛門牧師、泉丘高校の西脇勲先生の指導のもとに行われた。キャンプ一つ取り上げてもシティYとハイYと教会という三つの組織がうまくリンクしていたように思う。このキャンプには石川県立泉丘高校・石川県立二水高校・富山県立福野高校の生徒や卒業生が参加していた。参加者名簿には、米永吉範さん(当時、大学3年生)の名前も見られる。左掲の写真は、羽鳥主事の指導で筆者が洋弓をしている場面を撮ったもの。

東北大学に入学した当初、アパートに住んでいたが、1ヶ月ばかりで自炊生活は無理だと悟り、下宿生活に移った。しかし、この下宿は簡易旅館みたいなどころだったので、もっと学生に向けたところがないかと探しているときに、仙台広瀬河畔教会の牧師の娘さんから東北大学基督教青年会溪水寮の寮生募集のことを紹介され、面接を受けることにした。教会やハイYの経験があるので、問題なく入寮が許可され、学Y(学生YMCA)の活動にも参加することになった。溪水寮では寮生として4年間過ごしただけでなく、博士課程在学中に2年間主事として寮生活をした。

1974年4月に金沢医科大学に就職したことから、上関さんに誘われて1983年に金沢YMCA会員となったが、2000年代に入って諸般の事情で幽霊会員化してしまった。しかし、私が所属する日本基督教団若草教会の牧師をしておられたことのある井上良彦先生が2002年に金沢YMCAの理事長に就任されたことから、幽霊会員のままでは申しわけないと復帰することにした。また、2004年4月に脳梗塞を患い、金沢医科大学病院に20日間ばかり入院したことから人生観が多少変わった頃、三谷信三さんに誘われて同年12月、金沢犀川ワイズメンズクラブにも入会した。

以上のように私は、中学生のときに若草教会に行き始め、高校生のときにハイY、大学生のときに学Yの活動をし、社会人になってから金沢YMCAや金沢犀川ワイズメンズクラブの会員となった。その間に浮き沈みはあったけれども、様々なご縁を神様のお導きとして受けとめ、現在の私があることを感謝している。

金沢YMCAに集う子どもたちや学生リーダーたちが社会人になってもYMCAとのつながりを失わないように、ヤングが活躍する、文字通りのYMCAにするということを重点目標とし、実務体制を強化することが喫緊の課題だと思う。

## 随想 金沢YMCA創立70周年に寄せて

金沢YMCA会員 清水 淳

1982(昭和57)年10月に大阪YMCA六甲研修センターで開催された第4回日本YMCA大会に大阪YMCAのリーダーとして参加しました。金沢YMCAは千葉理事長とスタッフの中野さんが参加されていて「大阪でリーダーをしていますが、実家は石川県です。」とあいさつをすると、「金沢に来たらYMCAにも寄ってください。」と仰っていただいたので、春休み・夏休みの帰省の都度、顔を出しました。

1985(昭和60)年に就職し、最初の勤務が金沢でした。赴任し、最初の土曜日仕事を終えた後、YMCAを訪問しました。仕事上のつきあいがあり、近くに住んでいた秋吉孝一さんに誘われてサイクリングのプログラムに参加させてもらい、リーダー気分を味わわせてもらいました。県の青少年団体の集まりにも派遣していただき、他の団体と交流を持つこともできました。リーダートレーニングで上関主事のお手伝いをし、今後の活動について話をしていた矢先の1988(昭和63)年7月に富山へ転勤することになりました。その後、大阪に転勤し、再び富山勤務となり金沢YMCAにも顔を出すことができるようになりました。そんなある日、錦織大阪YMCA総主事が活動休止の話をしに金沢に来られると上関主事から電話があり、同席させていただきました。ようやく動き始めた時期であり、お手伝いもできる時期だっただけに残念でした。

YMCAでお話をさせていたくときには必ず「YMCA=You Must Come Again」という話をします。みんなが帰って来られる場所がYMCAだと思っています。2012(平成24)年から再び金沢勤務となり、金沢ワイズメンズクラブに入会しました。ワイズメンズクラブの第一の目的は「青少年育成団体であるYMCAの活動を支援すること」とされています。ワイズメンズクラブとしてYMCAの活動の方法・方向性を考えていかなければいけないのですが、なかなか進められないのが現状です。70年の歴史を価値あるものとするために、「何をやりたいのか」「何ができるのか」を考えていかなければならないと思っています。



ゆきん子キャンプ (2013年2月16日白山一里野温泉スキー場、後列右端が筆者)